



宮崎に寄せて 「実験」

実験はぼくら工業化学科の学生にとって、授業の中でも特に大切なものであった。一年生の時、まず定性分析がぼくらに課せられた実験であった。しかしすぐ実験をさせてもらえたわけではない。担当の塚本教授は定性分析の原書のテキストを我々に当番制で青写真コピーさせ、それをクラスメイトに配らせそれに基づいて講義した。

彼はパラグラフごとに区切って一人ずつ順番に読ませ訳させた。ぼくらはたどたどしい発音で読み、訳もひどかった。ただ沖縄出身の花城だけがフルーエントに読みの確に訳した。（彼は顔つきも西洋人に似ていたので、ぼくは彼がハーフに違いないと思った。）

こうしてぼくらはこの授業の前に辞書と首っぴきでわからない単語の意味をテキストに書き込んだ。しかし本番になるとやはり読みも訳もたどたどしかった。教授はぼくらに辞書に載っている発音記号を全部正しく発音できるように練習せよと言ったが、だれもしなかったのではなかろうか。しかしこのような授業を通じて、ぼくは英語にいずれ真剣に取り組まなくてはならないのだという実感を持った。

このような授業が数週間続いて、ぼくらの実験に対するあこがれは大きくなっていった。しかし最後の安全対策のための授業で教授は過去起こった事故の実例を挙げてぼくらに十分注意して実験をするよう警告した。ピペットを吸っていて濃硫酸を誤って口内に含んでしまった学生のことを彼は詳しく話して聞かせ、「20%の濃硫酸だけは間違っても吸い込むもんじゃありませんよ」と言って笑わせた。

塚本教授は人を笑わせる話術を心得ており、ぼくらをいつも彼の話しの中に引き込んだ。そして彼のユーモアは通例不意にぼくらを襲い、腹の皮がよじれるくらいぼくらは笑わせた。だからぼくらはまるで彼の不意討ちに身構えているかのように彼の話す言葉の一つ一つを注意して聞くようになった。それでも彼はユーモアの最も効果的タイミングを心得ていてぼくらのすきを突いて不意討ちを食わされた。彼はずんぐりと太って貫禄が十分あり、吉田茂の顔に凄みを加えたような面相で、目はやぶにらみであったので、ぼくらはいつも彼のどちらかの目ににらまれているようでありリラックスはできなかった。

ある夏の日の彼の授業中のこと、ぼくは少々教授の話から注意をそらし別のことを思っていた。すると突然教授が怒鳴りだした。ぼくははっとして彼を見ると彼の左の目がぼくの方を見ていた

のに気づき自分がしかられているんだと信じ込んだ。「なんとみっともない姿勢だ！だらしないぞ！」ぼくは自分が両手でほおづえを突いていたのに気づき恐る恐る両手を膝に持っていった。教授は目をむいてあごをしゃくり上げながら喧嘩口調で言った。「もっと恥ずかしくないようにできないのか！人前でそんなぶざまな格好をするもんじゃないぞ！！（と言うと急に語調が和らぎ）と言いたくなるような姿勢をこの分子はしているんですよ」しーんとしていた我々はどっと笑った。ぼくはほっとしたが心臓の鼓動はしばらく激しかった。ぼくと同じようにぶざまな格好をしていて自分がしかられていると思いついていた者はたくさんいたらしい。しかし教授はある分子の構造について述べただけだった。ぼくらはまた一本取られたのだ。この時以来ぼくは彼の授業では自然と姿勢が正しくなった。

塚本教授はぼくが卒業してまもなく家族の問題で意気消沈し婦人と共に青酸カリを飲んで自殺されてしまった。そしてその遺書の中に「私と〇〇子さんは2規定のシアン化カリウムを2ccずつ飲んで死にます・・・」と書き残された。ぼくはこれを週刊誌の記事で読んだ時、この彼の最後のユーモアについて内心ほほえまざるを得なかった。彼は死に際までユーモアのセンスを持ち続けられた。そして最後まで化学の教授としての面目を保たれた。

さて、実験が始まるとぼくらは初めてあこがれていた白衣姿になることができた。上級生たちは汚れた白衣のすそをひるがえしながらさっそうと廊下を歩いていたが、ぼくらはその姿をカッコいいと思った。だから入学前の子供が学生服を着れる日を待ちこがれるように、ぼくらはばばかりことなく白衣が着れる日を待ちこがれていたのだ。そしていったん着てしまえばもうそれはぼくらの普段着に近いものとなった。

自分の部屋でもぼくは普通白衣を来ていた。夏になると下はパンツ一枚でその上に白衣を着た。ぼくは宮崎での6年間で2着の白衣を買って愛用した。一着目は布は分厚かったが丈が膝あたりまでしかないものであり、綿製品であった。そのため3年目頃には黄味を帯びてきた。もう一着は確か4年目に買った。布は薄かったが丈はかなりあってあまり寒くなければ適当なコートとなった。大学の近くに5年目に引っ越してからは学校に行くにもそれを着ていたし、工学部より近い農学部の食堂にもそれを着て行った。白衣を着ていればハンカチもいらなかったしどこかで仮眠でもする時には毛布の代わりになったし、寒くなければ丸めて枕にもなった。だから本来の目的の実験着というよりは万能普段着であった。実際ぼくなどは実験室の中にいることはまれであり、その白衣の汚れはほとんど実験室以外の場所ですいたものだった。机のまわりを除くとほこりが積もったまま半年近くも掃除らしい掃除をしていないぼくの部屋の中では白衣はなくてはならない衣服であった。和服を着ると日本人はリラックスできると言われているが、ぼくは白衣を着ている時が一番リラックスでき安心できた。

化学科の実験室は有機化学と無機化学と化学工学の三つあった、がどれも他の校舎同様に老朽化しており何年も閉鎖されてほこりだらけになった小さな町工場を思わせた。窓ガラスの多くは割

れており、コンクリートの床はいたるところに穴があり、いろんな薬品で汚れていた。実験機もひどくいたんでおり、薬品の匂いがしみ込んでいた。実験室に白衣を着て入らなければならない理由はこれらの実験室を覗き見るならば一目瞭然であった。

やがて不慣れなぼくらが実験に着手し始めるとこの実験室に毒ガスが漂うようになり、ぼくなどは長時間いると気持ちが悪くなったものだ。

それでもぼくは実験自体には興味を持ち、人に遅れないよう頑張った。高校の化学の実験授業では5、6人からなる一つの班で一つの実験台を使用した。大学では各自に実験台が一つずつ与えられた。このことはぼくに自我意識を高めさせ、自分がこれからは人に頼るのではなく独立した個人として物事に当たらなくてはならないという気概を持つよう促した。それでもまた同時に他の仲間と同じものが与えられ彼らと同じことを一緒にやっていくのだということから得られる幸福感もあった。そこではライバル意識は消極的な形、すなわち人に遅れないようにしようという意識に過ぎなかった。

ぼくはその頃ドイツの化学者オズワルドの書いた「化学の学校」という本を読んでいて、実験というものが化学なる学問の本質的基盤であるという認識を持ち、したがって実験を好きになれない限り化学を好きになることはできないだろうと思うようになっていた。しかしぼくは不器用であり、また自分のすることは成功しないという経験から来る一種の自己不信を持っていたので、実験も次第に難しくなって精密さを要するようになってくると、それがあたりまえかのように適切な結果がビーカーや試験管の中に生じないことが多くなった。それはちょっとしたことであることが多かった。ある時ぼくのビーカー中の液体に苔のような異物が浮かんできた。ぼくがそれを嘆いているとすぐそばで実験をしていた田村が「アンモニアを少し加えてみたら」と言ったのでそうすると、その苔のようなものはたちまち消えてしまった。

実験はぼくの性格に合いそうにないと悟りだしたのは、一年の後期に行われた定量分析の時である。これは精密度の高い実験が要求され、根気も必要であった。**0.01mg**単位の測定を根気強く天秤に向かってしなくてはならない。誤差の範囲とか空中での浮力等細々としたものを計算に加味しなくてはならない。やがてぼくは実験を適当にやり、レポートを偽造することを常とするようになった。こうして実験技術よりも文書偽造技術の方が上達することとなった。最初、可でもない不可でもないもっともらしい数値を最終結果として得られたデータとして決めておく。次に逆算を重ねてゆき適当な誤差を加味しつつ途中の数値も編み出し、最後に実験のスタートにおける数値にたどり着く。これを偽造が悟られないように完成するにはきめ細かい感受性と同時に大胆さが必要であろう。ぼくはそれらの点では問題はなかったようだ。しかし肝心の実験自体においてはそのような大胆さがあだとなることが多かった。自然科学の世界では、人間のあいだで通用する大胆さによるまやかしやこけ脅しがまったく通用しないのだ。自然界を支配している厳粛で冷血な法則がすべての不正に間違いなく鞭を加えるのである。

ぼくはこのような経験を通して自然界の因果関係の絶対的規律と秩序を身をもって思い知らされ、それを初めて真理として受け入れる心構えが持てるようになった。あたりまえのことであるがそれがなかなか容易に受け入れられないものだ。日常の出来事をすべて必然的現象として受け入れることができるなら人はそれに腹を立てることがなくなる。自分の死をも静かに諦観することができるようになろう。たとえば自転車置き場で自分の自転車が自然に倒れそれが隣の自転車も倒し次々に将棋倒しに倒していったら、人は腹を立てて自分の自転車をけとばしたくなる。しかし自分の自転車が倒れるためにもスタンドが不良であるとかいった原因が必ずあったのであり、また次々に他の自転車が倒れたのも物理的必然の結果であるのとっさに悟れるなら腹も立たない。すべて物理法則に従った必然現象であってどこにも気まぐれな偶然現象はないと思うなら、自転車をうらむというような子供じみた感情は起こらない。すぐあきらめがつく。すべてが厳密な自然法則に従って起こるべくして起こったのである。その過程には何の悪だくみも不公平もない。ある過程が自分に不都合だったからといってその過程に関与した物質に怒りを抱いてそれを罰しようとするのは実に愚かなことである。

ぼくは実験を通じてこの必然的因果関係すなわち現象を客観的に、つまりあきらめの境地から見ることを覚えた。こうしてぼくはシャープペンシルの芯が紙の上で折れても、足を石につまずかせて痛めても憤慨することが少なくなっていった。もしこの因果関係を人間関係の中にも当てはめようとする寛容さがあり、人間のさまざまな行為や言動を必然的現象としてとらえることができるなら何とすばらしいことであろう。人にどんなことを言われても、それにはある原因、たとえばその人は無知であるとか誤解しているとかの原因がありほとんど必然的にそう言わざるを得なくなっているのだという客観的受けとめ方ができるなら、そう腹が立たない。人にしかられても、その人はヒステリーだとか怒られなければならないようなことを自分がしてしまっていると知っていれば、それを客観的に受けとめられる。人にたたかれてもそれはある原因から必然的にその人はそうせざるを得なくなった、その原因をたどってゆくとその人の責任のないところにそれがあるはずだと思えることができるなら、むしろ自分の意に反して人をたたかざるを得ない必然に追い込まれたその人を哀れにも思うことができる。ちょうど将棋倒しに倒れていく自転車のどれにも隣の自転車を倒してやろうという悪意がないのにそういう結果を起こさざるを得なくなるのと同様に、人間の生活の中においても悪意というよりも必然に迫られて行う行為や言動がすべてであると言っていいだろう。そしてそれを悟れば悟るほど人はその一見必然と思えるものから少しずつ解放され自由な生き方ができるようになるだろう。

人間関係における因果関係は必然とはいえ各自の考え方が変化するに従いその必然の内容も変化する。自律できればできるほど人は因果関係の中でもより自由に振る舞えるようになる。自転車なら隣のものが倒れると自分も倒れなくてはならないが、人の場合自分を保つことができるし、倒れなくてはならなくても隣のものに害を与えることなく倒れることもできよう。自律したものは人間の行為を現象と捉えることができるので、ある行為が愚かなものであれば、自分はそれに倣わないことができるのである。

しかしぼくはここまでは悟れなかった。実験はぼくに物事をあきらめをもって客観視することを教えてくれたが、それが人間世界にも通用するのだという悟りにまではぼくは到らなかった。ぼくは実験で失敗しても器具や薬品を呪わなくなったが、そういう難しい実験を課する先生たちを呪った。

2年生になると有機合成の実験が始まった。フィーザーの「Organic Experiments」がテキストで、それぞれの実験をする前にその部分を和訳して提出せねばならなかった。

有機実験室は芳香族の薬品やアセトンやアルコール類を扱うので硫化水素などの毒ガスが潜む無機実験室よりも匂いは良かった。すぐそばに、どうしてそこに置かれるようになったのかだれも知らなかったが、古いオルガンがあったので、時折だれかが弾いて音楽も流れた。しかしそんな有機実験室も危険な場所であることに違いはなかった。ある時コンクリートの床に液がこぼれそれが引火して燃え始めた。同僚たちは水をかけたり、強く扇いだりして消そうとしたが火は燃え続けた。そしてその火を消したのはだれだろうぼくであった。ちょうど「燃焼の科学」という本を読んでいて燃焼の三条件を熟知していたぼくは、すぐにその一つの条件が簡単に除けることを見てとり、比較的大きなビーカーを取ってその炎の上からかぶせた。するとその炎は一瞬のうちに消えたのであった。考えてみればあたりまえの事で、ぼくが登場するまで誰もそれをしなかったことが不思議なくらいだ。それもみんな化学を専攻している学生たちなのだからなおさらだ。しかし知識は必ずしも緊急の時に役立つとは限らないのだ。緊急の時人は体で覚えてきたこと、つまり経験が教えるところの方策をまずとる。だからあの時ある者たちはすぐに水をかけたし、他の者は強い風で吹き消そうとした。しかしこの場合の火元は彼らが今まで経験したものと違って、彼らの経験は役に立たなかった。

ぼくはこの時の英雄的行為で株を上げたが、しかしまたすぐへまをして株を落としてしまう。無水硫酸に水を注ぐというへまをしてしまったのだ。一瞬に沸騰した水は飛び散りぼくの額と左手に当たった。ぼくは一瞬大やけどをしてしまったと思ったがあとでたいしたやけどではないとわかった。しかし眼鏡をかけていなかったら目をやられていたかもしれない。たちまち同僚たちは噂を聞いてぼくを見学するために実験室に来た。噂の常で真実は誇張されぼくはいつのまにか顔をひどくやけどしてしまったというように報じられていたらしい。ところがぼくのやけどは眉や額にかすかに、それに左手の二ヶ所に点状の跡を残しただけのものだったので、ある者たちは「なあんだ」というふうだった。左手の二点のやけど跡は今も残っており、アルコールを飲むたびにそこがまず赤くなるのでアルコールに弱いぼくの赤信号機になっている。

三年生になるといよいよ草野教授の物理化学実験が始まった。これはぼくのみならず化学科のほとんどの学生にとって大きな試練となり、従ってそれにどのように対処するかは人様々であった。ぼくもその一人だと思うが、それにより運命を変えられた者も何人かいる。ひとことで言うと

草野教授は厳しかった。まやかしを一切受け付けない自然科学の諸法則の権化のような人物であった。一年間でこの実験を完了して四年生に無事になれたのは、36人中6人だけであった。そして2年目で合格して4年生になり卒論に取りかかれたのは20数人であった。ぼくは3年ちょっとかかった。すなわち物化実験のために2年だけ留年したのだ。今でも、卒業できないで最果ての地に取り残されたような惨めな自分にもどった夢を見ることがたまにある。しかし中村や学生運動に走った岡本はとうとうこの実験にパスできず大学を去っていった。

中村の送別会は大学生生活6年目を迎えてもまだ卒業できないで残っていた5人が集まって飲み屋で行われた。革マルの岩田もいたし秀才の川井田もいた。中村は比較的まじめな青年で彼の温厚な性格に魅かれてぼくは一時彼を模範として見ていたことがある。彼はアルバイトをし過ぎたのかもしれない。あまり大学から疎遠になっていると、いざ本腰を入れて学業に取り組もうとした時に足が地につかないような状態になってやること成すことが空回りしてしまうらしかった。彼は大学をやめるまでの一時期ぼくに倣って英語を本気で勉強しようとしていた。大学の卒業証書をあきらめなくてはならなくなりかけていた彼にとって何か特技を身につけておくことが急務であった。ぼくはすでに英検一級に合格していてそれは卒業証書よりも実質のあるものだと思っていた。彼もぼくの生き方に影響され始めていたが、意外に早く宮崎を去っていった。ぼくは彼が英語でなくても何かに打ち込んでどこかで立派になってくれていることを望まずにいられない。ある時、宮大工業化学科の同窓会東京支部の名簿に彼の名が載っているのを見つけた。中退した彼ではあるが、やはりぼくらにとって彼も同窓の仲間であるには違いないのだ。

草野教授はまず実験のための講義を数回行い、特に誤差計算について詳しく学ばせた。そして誤差計算の課題を与え、レポートを書かせ、それにパスできたものだけが必須の実験に取り掛かれた。ここを突破できないで一年過ごす者が多かった。ぼくらは草野教授をうらんだ。今はそんな気持ちはまったくなくむしろ懐かしさと感謝に近い気持ちを持つのだが、その頃はとにかく彼をうらんだ。そしてぼくの場合その恨みから発散してくるエネルギーを英語の学習に注いだ。そして物化実験受講2年目にしてようやく実験に取りかかれるようになるとぼくはレポートを英語で書いて出した。ぼくの側から言えば教授に対する反抗であった。したがって勇気がいった。教授はぼくの英語もチェックしたのでぼくのレポートを見る時間が長くなった。ぼくの後ろに並んで番を待っていた菊地から苦情らしき声が上がったこともある。しかし彼も含めて多くの者はむしろぼくに声援を送っていた。このぼくの行為はぼくの人生において記念碑的意味を持っている。大学生4年目にして初めて個性を発揮できたのだ。そしてそれは自律できるために必要なことであった。

物化実験3年目の4月、ぼくらまだ完全に合格してない者たちは下級生たちと一緒に3度目の実験のための準備講義を受けた。その最初の日、草野教授は言った。「君たちは化学を勉強するためにここに来たのだからね。」ぼくはこの彼の言葉を決して忘れないだろう。彼はぼくに対してこの言わずもがなの発言をしたに違いないと思った。そしてぼくはこの彼の言葉の中にぼくの

見舞ってきたパンチの手ごたえのようなものを感じた。ちょうど拷問でなかなか口を割らなかった者の口からついに告白を引き出したという感じである。いや拷問を受けていたのはぼくの方で、ぼくはとうとう口を割らなかったが、拷問を加えていた彼の方が先にうっかり弱音を吐いたという感があった。ぼくはこのとき、この人を越えた、と思った。確かにぼくは化学を学ぶために来たのであり化学生としては失格者であった。しかし一芸をものにしていて。それは喜ばしいことではないか！他の大学に先駆けて一年生からほとんどの授業や実験を原書の教科書を用いて学ばせた宮崎大学の工業化学科から英語に専門替えする学生が一人くらい出てもいいではないか。スペシャリスト候補生と呼んで恥ずかしくない学生をまたひとり世に出したことを教授はむしろ誇りに思うべきではなかったろうか？

写真(photos):

amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro